

新任教員に求められる資質能力に関する研究（Ⅲ）

— 初任教員対象インタビューを通して —

Study on competencies of novice elementary school teachers (Ⅲ)

:Through interviews with novice teachers in elementary schools

酒井 研作・梶田 英之・丹 孝子・安田 仁・山田 恵次・道法亜梨沙

SAKAI Kensaku, KAJITA Hideyuki, TAN Takako, YASUDA Jin,

YAMADA Keiji and DOHO Arisa

キーワード：教員養成・教員の資質能力・教職入門

1 はじめに

教員に求められる資質能力は、いつの時代も社会的関心事の一つである。とりわけ教員の大量採用による教員採用試験の採用倍率の低下やそれに起因する教員不足などが社会問題となっている昨今、教員にはいかなる資質能力が求められるのか、また、そのような資質能力を教員の養成・研修においていかに保障していくのかという点は、研究上あるいは教員政策上の課題となっている。

教員に求められる資質能力に関しては、これまでも様々な政策文書で言及されている。近年では、2015年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」や2021年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校校育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」、2022年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」などが挙げられる¹⁾。また、法制面においても、2016年の教育公務員特例法の改正等により、教員養成大学と教育委員会が連携し教員の資質能力の向上にあたる体制の構築が図られているところである。

本稿が対象とする新任教員が抱える困難についてはいくつかの研究蓄積がある。例えば、高等学校の新任教員を対象としたインタビューを実施した山口は新任教員が同僚教員との関係構築に困難を抱えている実態を明らかにしている（山口，2019）。同様に、大塚は中学校・高等学校の新任教員を対象としたインタビューを通して、職場風土や職場環境に戸惑う教員の姿を描いている（大塚，2015）。また、高平らは、小学校教員を対象とした質問紙調査を実施し、新任教員が授業、初任者研修、学級経営、軽度の発達障害が疑われる児童への対応に困難を感じることを報告している（高平他，2014）。

本研究グループは、以上の研究関心にもとづき、新任教員が、着任した学校でいかなる点で困難を抱えるのか、また、新任教員にはいかなる資質能力が求められるのか、彼らを指導監督する校長を対象としたインタビュー（以下、校長インタビュー）²⁾ および初任者研修で日常的に新任教員を指導する立場にある初任者研修指導教員を対象としたインタビュー（以下、指導教員インタビュー）³⁾ を通して、その実態の一端を明らかにしてきた。

校長インタビューでは、新任教員が「児童との関係構築」「教科指導」「保護者対応」の場面で困難を抱える実態が描出された。また、校長が新任教員に求める資質能力として、「社会人としての

素養」や「教師としての素養」を重視しているとともに、「教科指導」の基盤となる基礎学力の必要性を強く感じていることが明らかとなった。一方で、「学級経営」や「生徒指導」、教員間や地域・保護者との「連携・協働」に関する資質能力については、必ずしも着任段階で十分である必要はなく、学校現場における OJT をとおして身に付けていけばよいという認識であることも明らかとなった。

指導教員インタビューでは、新任教員が直面する困難場面を「学級経営や児童との関係づくり」「職場内の人間関係」「職務の多忙」と整理できた。また、初任者研修指導教員が新任教員に求める資質能力としては、「子ども理解」「学級経営」「生徒指導」「教科指導」に関する言及が多く見られ、特に、「子ども理解」「学級経営」「生徒指導」の基盤として、児童を多面的に理解し信頼関係を構築する力の重要性が指摘されていた。

以上を踏まえて、本稿では、調査対象を、初任教員自身に替え、同様のインタビューを実施する。校長インタビューおよび指導教員インタビューの結果も踏まえ、新任教員が抱える困難及び新任教員に求められる資質能力について考察を加えることを目的とする。

2 調査の概要

(1) 調査対象・調査時期

調査は、2022年11月から12月にかけて実施した。調査対象者は、広島市立小学校で勤務する教諭6名である。調査対象者は、いずれも教員養成課程大学を卒業後すぐに着任した教諭である。着任1年目の状況を調査するため、経験年数3年以内の教員を選定した。調査対象者の属性は表1のとおりであり、調査対象者毎に、自身の教員1年目の状況を振り返ってもらいつつ、1時間程度の半構造化インタビューを実施した。

表1 調査対象者の属性

対象	性別	経験年数
A 教諭	男性	2年目
B 教諭	男性	2年目
C 教諭	男性	2年目
D 教諭	男性	2年目
E 教諭	女性	3年目
F 教諭	男性	3年目

(2) 調査内容

調査内容は大きく2点である。1点目は調査対象者自身の経験に関する質問である。自身の教員1年目を振り返り、いかなる困難に直面したのか、調査対象者自身の経験に基づき聞き取りを行った。

2点目は、新任教員に求められる資質能力に関する質問である。新任教員に求められる資質能力について、調査対象者がいかなる考えを有しているか聞き取った。また、質問に際して、兵庫教育大学が開発した「教員養成スタンダード」(別惣他, 2012)及びいくつかの自治体で策定された「教員育成指標」⁴⁾の内容を基に、「社会人としての素養」「教師としての素養」「子ども理解」「学級経営」「生徒指導」「教科指導」「連携・協働」の7つの観点を設定し、それぞれの観点について、調査対象者がいかなる認識を有しているか聞き取りを行った。

3 調査結果の分析

(1) 困難を抱える新任教員の実態

インタビューでは、調査対象者に、自らの経験を振り返りつつ、新任教員が学校現場でいかなる困難に直面しているか聞き取りを行った。その結果、①配慮を要する児童への対応、②学級経営や児童との関係構築、③教科指導、④職務内容の多忙の観点から、調査対象となった新任教員が直面した困難の実態を描出できた。

①配慮を要する児童への対応に困難を感じる教員

A教諭は、4年生を担当した1年目に苦労したエピソードとして、特別支援学級在籍の児童との交流学習を挙げている。A教諭が担当するクラスには、社会や図画工作などいくつかの教科で、特別支援学級在籍の児童2名（自閉症者、知的障害者）が授業を受けに来ていた。A教諭は、そのような児童に対する学習の支援や関わり方の難しさを実感したと述べている。また、E教諭は、2年生担任だった1年目に担当した児童との関わり方に苦労したとのエピソードを挙げた。当該児童は、家庭環境に課題があり、1年生の頃から配慮が必要な児童であった。E教諭が担当した際も、授業中、教室を歩き回ったり教室から出て行ったりするなどの行動を示していた。E教諭は、当該児童への支援に苦慮し、新採指導教員や先輩教員に様々なアドバイスをもらいながら試行錯誤したと述べていた。

特別支援教育など教育的配慮を要する児童については、教員養成課程においても学修するが、実際にそのような児童と関わる経験は限られている。これらのエピソードは、新任教員にとって、障害のある児童や家庭環境に課題のある児童など、何らかの教育的配慮を要する児童へ実際に対応することが非常に困難である様子を示している。

②学級経営や児童との関係構築に困難を感じる教員

A教諭は、学級経営を進める中で、児童同士のトラブルへの対応に苦労したとのエピソードを挙げた。A教諭が担当した4年生のクラスでは、児童同士のトラブルが頻繁に発生していた。A教諭は、これらのトラブルへの対応に苦慮しながらも、先輩教員に助けをもらいながら、なんとか解決していったと述べている。また、F教諭からは、児童との関係構築に苦労したエピソードを聞くことができた。1年目に5年生を担当したF教諭は、2名の女子児童との関係構築に苦労したと述べている。当該の女子児童は、F教諭を受入れず、授業から抜け出したり、F教諭に対して暴言を浴びせたりしていた。F教諭はなんとかこの女子児童との関係性を構築しようと試行錯誤したが、結局、1年間上手くいかなかったと述べている。

これらのエピソードは、新任教員が、児童同士の関係性を上手く構築できず学級経営を円滑に進めることが難しい様子や児童との関係構築に苦慮する様子を表すものである。

③教科指導に困難を感じる教員

教科指導に関しては、A教諭から児童間の学力差についてのエピソードを得られた。A教諭のクラスは、授業内容を事前に塾で学習してくる児童がある一方で、既習事項を十分に習得していない児童が混在し、児童間の学力差が広がっている状況であった。A教諭は、このようなクラスの実情を踏まえ、授業づくりをどう進めるべきか苦労したと述べている。また、B教諭は、担当するクラスに、座席に着席し続けることができない児童や授業中に立ち歩いてしまう児童、同級生と遊んでしまう児童がおり、その中で、いかに授業を成立させていけばいいのか悩んだというエピソードを挙げた。F教諭は、可能な限り児童全員を巻き込むような授業をしようと努力したものの、悩み続けた一年だったと述べている。

これらのエピソードは、多様な児童を前に、いかに授業づくりを進めていくのか悩む新任教員の姿を表すものである。また、授業づくり以前に、前提となる学習規律の重要性及びその確立の困難さも示している。

④職務の多忙に疲弊する教員

C教諭は、学生時代に思い描いていた教師という職業イメージと実際の職務内容とのギャップについて述べている。大学での学修や教育実習、ボランティアなどを通じて、教師が多岐にわたる仕事をこなす非常に多忙であるとのイメージは持っていたが、現実には想像以上に大変だったと述懐している。また、B教諭からは、クラスが上手くいっていない時など出勤するのが怖いと感じることもあったというエピソードが得られた。同じように、E教諭からも、1年目の秋頃から精神的な疲労を感じたというエピソードが得られた。このようにB教諭もE教諭も1年目の職務を遂行する中で精神的な負担を感じていたものの、同僚教員や他校で勤務する同期の教員からアドバイスを受けたり励まし合ったりすることで、その精神的負担を乗り越えることができたと述べている。

これらのエピソードから、新任教員には、彼らが想定した以上の業務量が課せられている様子が窺える。同時に、B教諭やE教諭の発言からは、大変な状況において、同僚や同期の教員の存在や繋がりが大切になることを示唆される。

(2) 新任教員に求められる資質能力

次に、新任教員に求められる資質能力についてである。本調査では、調査対象者に自身の1年目の経験を想起してもらいつつ、新任教員にいかなる資質能力が必要だと実感したか探っている。その際、「社会人としての素養」「教師としての素養」「子ども理解」「学級経営」「生徒指導」「教科指導」「連携・協働」の7つの観点に沿って調査した。以下、それぞれの観点ごとに調査対象者の認識を整理していく。

①社会人としての素養

「社会人としての素養」については、その具体的な姿として「言葉遣い、礼儀、マナーが身に付いている」「素直に他の教員に相談する、謙虚に他の教員の意見を聞く」「コミュニケーション能力がある」「ストレスなど心身の健康管理ができる」「公務員（教員）としての倫理観を持っている」を想定した。これらの項目を提示しつつ聞き取りを行った結果、調査対象者からは以下のような多様な発言が得られた。

（社会人としての素養について）すべて大事なかなとも思ってしまいうんですが、特に選ぶのなら、「素直に他の教員に相談する、謙虚に他の教員の意見を聞く」ですか。やっぱりスタートラインに立ったところで、分かんないことだらけの中で、他の教員の方に相談する力がないと、自分一人でどうにかしようと思っても解決できるものはないので。（A教諭）

（社会人としての素養について）どれもすごい大事だなと思うし、そこは意識してやってきたつもりですけど。他の教員に相談する、謙虚にっていうところは（大事だと思う）。一人でできることなんか一つもない感じなので。（B教諭）

「素直に他の教員に相談する、謙虚に他の教員の意見を聞く」という部分は、一番苦労しました。今、同じ学年に1年目の先生がいるんですけど、その先生、自分を隠さないというか。分からないところは分からないとしっかり聞いてくるので、それを見ていると、1年目の自分と比べてすごいなって思います。（D教諭）

（社会人としての素養について）全部大事だなとは思いうんですけど、他の先生方に相談したり、謙虚に話を聞くっていう姿勢はすごく大事だな、1年目は特に大事だなって思います。（E教諭）

(社会人としての素養について)どれも大切だと思いますが、やっぱりコミュニケーション能力っていうところ、先輩の先生方の話をしっかり聞く、これは必要だなと思いましたね。(F 教諭)

(ストレスは)なかったと言ったら嘘になるんですけど、間違いなくあったんですけど。教員のソフトボールチームに入っていて、そういうのがストレス解消になってます。市内の教員が集まってやるんですけど、大学の同級生も来ますよ。(A 教諭)

ストレスのところは、他の学年の先生方と話せるからストレスもかなり緩和されているなっていう実感はあります。(B 教諭)

2番目に大事なものは、ストレス。ため過ぎると子供に返るなと思っていて。理性が抑えきれないですね。感情で怒ってしまうときが。それはとてもまずいなと思っているので、ストレスのマネジメントというか、管理するのは大切。(D 教諭)

調査対象者の多くが、先輩教員に相談する力や先輩教員の意見や助言を謙虚に受け止める姿勢の重要性について発言している。E 教諭からは、「1年目は特に」という発言も得られた。一方、D 教諭は、自身の1年目を振り返り、そのような資質能力が自身に欠けていたために苦勞したと述懐している。また、メンタルヘルスに関する発言も得られた。D 教諭は、ストレスを溜め過ぎることで、児童への指導に悪影響を及ぼすとの反省を述べている。一方で、A 教諭や B 教諭の発言からは、同僚教員とのコミュニケーションや共通の趣味を持つ教員同士の交流が、ストレス緩和に効果的であることが窺えた。

②教師としての素養

「教師としての素養」については、具体的な姿として「教育に対する情熱がある」「子どもの人権を尊重する」「学校組織の一員としての役割を果たす」「常に自分を振り返り、学び続けることができる」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

(教師としての素養について)大事なものは、教育に対する情熱だと思います。授業を考える上でも、やっぱり子供たちに力を付けたいという思いをもとに考えているので。そこの教育に対する思いが無かったら、授業とか考えるのも難しいなと思ったので。(A 教諭)

私は教育に対する情熱だと思います。私に情熱があるかどうか。一生懸命に子供に勉強を教えてあげようとか、投げ出さずに頑張ろうって思う気持ちが一番大事かなと思うので。(E 教諭)

ここでは、やっぱり、「教育に対する情熱」と「常に自分を振り返り、学び続けることができる」というところですね。やっぱり、子供がかわいいとか楽しいとか。全部(仕事が)しんどいと思っても成長しないだろうし。どうせやるんだったら子供が成長するようにやるべきだと思うので、情熱が要ると思いますね。情熱があると、自然と振り返りますし。授業失敗したとか、心が折れそうなこととかありましたけど。(F 教諭)

私の小学校では、地域的にしんどい家庭が多く、校区に児童養護施設もあります。そうなると、人権っていうとちょっと大げさかもしれませんが、関わり方はすごく考えないといけないなっていうところですね。他の子との差が生まれないよう配慮しなくちゃいけないし、言葉一つでもそこ(子供のしんどい状況)を理解せずに指導しちゃうと、子供も、先生に理解されてないのかなってなっちゃう。(B 教諭)

A 教諭、E 教諭、F 教諭からは、教育に対する情熱を持っていることの重要性が窺える発言が得られた。いずれの発言からも、教育に対する情熱が教師として職務を全うするための強い動機付け

やモチベーションとなっていることが分かる。また、配慮が必要な児童が多く在籍する学校に勤務する B 教諭からは、児童が抱える背景を理解し適切な指導を行うためには、児童の人権を尊重する意識が重要であるとの発言が得られた。

③子ども理解

「子ども理解」については、具体的な姿として「発達に関する基礎知識がある」「子どもの特性や心身の状況を多面的に捉えることができる」「子ども同士の関係性や仲間集団を把握し指導に活用できる」「公平かつ受容的・共感的な態度で子どもと関わるができる」「特別支援教育に関する基礎知識があり、指導や支援に活かすことができる」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

(児童と) 長く関わってきてると、悪い面とかマイナス面ばかり気になって、それが自分でもしんどくなるので、常にいいところを見てあげて、できたところを見てあげてっていうのは、そこが多面的っていうか、一つのことを色んな角度から見るっていうのは大事なのかと。(B 教諭)

一人一人の子供を分かっていると学習の指導もできない。何かトラブルがあったときも、その子にあった指導をしないと、(指導が) 入っていかない。子供の特性をしっかりと担任として分かっておかないと難しいことがたくさんあるなと思います。(E 教諭)

(指導が難しい児童について指導教員に相談した際) 先生は、私が思いつかないようなこと、「その子にとったら、こうなんじゃない?」というのを返して下さって、その先生から、冷静になって一歩引いて、色んな事をこうなんじゃないかって考えてあげるのが大事っていうのを教わったかもしれないです。(E 教諭)

B 教諭や E 教諭の発言からは、児童との関係性の構築のために、子ども理解を重視しており、中でも、児童を多面的に理解しようと努力している様子が見て取れる。特に、E 教諭は、多面的に児童を理解することが、学習指導や生徒指導の基盤となると発言しており、このような資質能力の重要性が確認される。

④学級経営

「学級経営」については、具体的な姿として「学級担任の役割・職務内容に関する基礎知識を持っている」「子どもとの信頼関係を重視し、その構築に努めることができる」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

やっぱり一人一人個性がある中で、素直に言うことを聞けない子への対応の仕方だったり、どういう声掛けをすればその子は前向きに取り組めたりするのかなっていうのは、すごく難しかったなっていうのがあります。(A 教諭)

学級経営っていうのも、なかなか学生のときは、イメージもできなかったの。いろいろ読んだり、講義とかでもたくさんあったんですけど。実際クラス持ってみてわかったことがほとんどだとは思いますが。やっぱり実際に見て、その子たちを目の当たりにしてどうしていきかっていう感じでしたね。(B 教諭)

担任をする以上、子供の様子を見たりとか、その子が怪我したりだとか、そういった対応だったり、体調の変化の様子だとかっていうのを見ないといけないです。そこで個別で話をよく聞いたりとか、まあよく、保健室とはよく繋がって、話をしていくうちにその子も段々と行かなくなって。本当に保健室との連携があってからこそなんだろうなっていうのは思って。やっぱり、そこはよかったなっていうふうに思います。(C 教諭)

学級経営は、誰とでも仲良くなりたいなと思っていて、話しかけたら一緒に考えられるというか、一緒に悩むことができる。話を聞けるとかそういった力をつけてほしいなと思っているので、そういったところは自分の行動から、子供たちに見せるしかないと感じています。(D 教諭)

子供との信頼関係は、自分がぶれない軸みたいなのを持ってないと子供が信頼してくれなかったり、こっちも子供のこと信じられなくて、全部自分でやろうとしたりするので、自分のこのクラスをこうしたいっていう軸は大事だなと思います。(E 教諭)

信頼関係ですかね。ここが良ければ、やっぱりいい授業はいい学級経営からだ、どれだけすごい授業準備したとしても、子供がやろうと思わなかったらできないし、逆にどれだけ変な授業しても、子どもたちと関係ができていたら、どうにかしようと思ってくれるし、(F 教諭)

どのインタビューからも、学級経営に苦労した様子が窺える。その体験の中で、F 教諭の発言にもあるように、「信頼関係の構築」の必要性について体験を通して学んでいる。この「信頼関係の構築力」の重要性については、指導教員インタビューにおいても指摘されており新任教員が有しておく必要のある資質能力の一つであると言えるであろう。さらに、D 教諭や E 教諭は、教師自身の「姿勢や考え方」もこの学級経営を円滑に進める上で重要なことを述べている。そして、C 教諭は、学級経営には児童理解のために他の教員との連携も重要であると述べている。

⑤生徒指導

「生徒指導」については、具体的な姿として「子どもの問題行動の背景を多面的に捉え、対応方法を考えることができる」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

そうですね、やっぱり何かトラブルあったときには話をしながら、どう対応すればいいですかねっていう相談をさせてもらっているの、同じような感じにしています。やっぱり、信頼関係がないと、話も入ってこないなっていうのはすごく実感しています。(A 教諭)

生徒指導も全然違いますね、やっぱり今は。そうです、SNS のこともかなりありますね。(スマートフォンなど) 持っている方が当たり前になってきているので。(B 教諭)

去年は、生徒指導ってなったときに怖くて。どう指導していいの。怒っていいの、大きい声出していいの。今でもまだ不安なことが多いです。ちょうど隣の先生は生徒指導主事なので、そこはもう相談しやすく(助かっている)。(C 教諭)

生徒指導は、生徒指導主事と学年に一人教育相談の役割の先生がおられて、その先生が、毎日、生徒指導に関する、今日何かありましたかと話しかけてくださるので、そういったときに一緒に対応方法を考えたりとか。こうしようと思っているんですよと伝えたら、いやもっとこうの方がいいっていうのを。学年や集団でやっていますね。(D 教諭)

でもやっぱり不登校の子とか、その傾向がある子がクラスにいたらずっと気がかりなんですよ。しかも、どうしていいかも分からないし、放課後毎日連絡していいものなのか。連絡しても、保護者の方はまた先生から電話来たって思うだけなんじゃないとか。そういうのも全く分からないので、そういう子がもしクラスに、1年目のときにいたら不安だったと思います。(E 教諭)

知識はもちろん絶対に必要だと思うんですが、それをとっさに出るかというか、一番ふさわしいものを出せるかっていうのは、知識というところだけじゃない感じ。その人がどう生きてきたのか。というよな、大学で学んだこと以外もやっぱり必要だなと。(F 教諭)

これらの発言から「生徒指導」については、新採時以降経験を積んでも常に困難な面があると感じていることが窺える。また「生徒指導」は学年や学校の体制によって進められており、初任者に対する相談体制も整えられていることが窺える。その中で、F 教諭は、知識の大切さを理解した上でそれを生かすことのできる土台（経験・生き方）が重要であると述べている。さらに、A 教諭、学級経営と同様に「信頼関係の重要性」を述べている。また、B 教諭は、SNS に関連する問題といった時代とともに変化する生徒指導について述べている。

⑥教科指導

「教科指導」については、具体的な姿として「学習内容の系統性・学年間のつながりなど学習指導要領の内容を理解している」「教科等の内容に関する専門的知識（基礎学力）がある」「板書・発問・指示の仕方など授業の基本的な指導技術を身に付けている」「ICT を授業に活用することができる」「子どもの実態を踏まえ学習指導案を作成できる」「子どもの学習に対する評価方法を理解し、学習指導に活かすことができる」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

大学のときに字を綺麗に書きましょうという話があったりしたので、やっぱり子供たちが見るものなので、そういう面に関しては、綺麗に書くことを意識できるなっていうのは、大学からの学びの続きだなっていうのは、すごく思います。(A 教諭)

そうですね、板書・発問・指示は、やっと去年、ちょっとずつ引き出しが増えてきたかなってぐらいですけど。やっぱり他の先生方の方を見るのが、一番勉強になるなと。こういうとき発問するんだ、とか、板書をやるんだ、とか。(B 教諭)

ICT のところは、やっぱりかなり大学の学びが生きてると。Google アカウントとかをずっと大学でも使ってたから。教員になってもずっと使うので、逆にそうなる現場の経験ある先生方より、若い人の方がわかるって状況がやっぱりたくさんあるので。(B 教諭)

学習評価ですね。教育実習の際に、評価をしてないですよ。ただただ授業で作って、それをこなして、評価するまで行けてないってのがあって、目標は目標で立ててはいたんですけど曖昧になっていて、漠然としていたの、そこはここがやっぱしんどい。現場に出てきたとき、評価のところをしっかりと、指導と評価の一体というからね、それをもっとこう、大学の中でやって身に付けておくべきじゃないかなというふうに思ってくる。(D 教諭)

どれも大事なんですけど。発問とか指示の仕方とか授業って授業の基本的なことは、大事なかなと思います。(E 教諭)

教科書を全学年で見た方がいいと思います。大学生のときは時間があるし、見た方がいい。(授業を)系統的にやっぱやりたいんですけど、僕の初任のときは本当にぶつ切りの授業していたので、授業の繋がりがなかったというか。5年生だからといって5年生だけの勉強すればいいわけじゃなくて、その1・2・3・4年生とどんな学習をしてきたのかっていうのを知らない。他の先生に見てもらったときに、これ4年生でやったよねとか、3年生でやったよねって言って、子供たちが「あっそれか」って言い始めるんすよ。僕そんなのないじゃないですか、5年の授業しか。なので、そこは系統は必要だと、どういう流れでこういう学習をしてきているのか、これが6年のあそこに繋がるために今必要なんだとか。(F教諭)

勉強はしてた方が、その教員採用試験だけじゃない根本的な学力、小学校だけじゃなくて小・中・高・大の知識は絶対にある。その上で、やっぱり授業というか、幅が広がるので。授業のときの子供の素朴な質問に答えられるとか、発展的に言えるとか、これ中学校で習うんだけど、これ高校で習うんだけど、そういうときに学校の楽しさ、その必要性を理解できます。(F教諭)

基本的に授業をすぐ作れる、作れるというか作ろうとできる、あんまり抵抗感がなかった。初任者指導の先生に「来週水曜来るから、その日の指導案作ってね。」と言われたときに、何も焦ることはなかったし、指導案自体を作ることにも何も抵抗なかったの、そこはすごく良かったですね。なので、大学での学びはすごく良かったです。(F教諭)

教科指導において、調査対象者の発言からは、大学における養成課程において指導案作成や模擬授業練習、ICT活用において経験を積んでいたことが、新規採用の1年目からすぐに役に立っていると感じ、自己肯定感をもつことができていることが窺えた。一方で、課題としては、学習内容の系統性の理解、また、評価について具体的な方法や内容についての理解が不十分と感じている様子が窺えた。また、教師として必要な基礎学力はもとより、指導技術としての板書力や指導と評価が一体となった授業力を身に付けておく必要があるとの発言も得られた。

⑦連携・協働

「連携・協働」については、具体的な姿として「他の教員と情報共有など連携ができる」「保護者や地域の声に耳を傾け、誠実に対応しようとする」を想定し聞き取り調査を実施した。その結果得られた発言は以下のとおりである。

僕のクラスにも交流の児童が1人いるので、特別支援の先生とは時間割がこうですよとか、時間割変更があったりとかしたらすぐ。自分もちょっと抜けていることもあって迷惑かけることもあるんですけど。(B教諭)

家庭連絡がまさに、施設の方との連携になるので。でも施設の方も、1人の先生で何人もの子供を見られてたりとかあるので。施設の先生も勤務形態っていうか、必ずその先生がずっとおられるわけじゃないので、うまく連携できてなかったなってこともたくさんあります。今まで自分が見てきたことが何だったかと思うぐらいでした、本当に。だからもう、子供たちもそうなんですけど、やっぱりたくさんの人と連携するっていうところが必須だと思っていました。(B教諭)

(他の教員との情報共有は)重要です。大切です。やっぱり教育相談部の方が話しかけてくれるので、そこで情報交換したりとか、職員室も6人同じ学年の方がいるんですけど、その先生方も近いです。連携しやすい環境ですね。(D教諭)

連携とか協働、どちらも大事って思いました。大きいことじゃなくても、今日こんなことがあったんすよとか。笑い話でも、すごい私が怒った話でも、いろんな話を聞いてくださるから、あとで言ってもらえるんすよ。すごく先生たちと話すのは大事だと思います。いいことがいっぱい聞けます。(E教諭)

保護者や地域をないがしろにしては結局よくはない。僕らなんか1日の半分ですからね、話しするのは。もう半分は保護者の方と子供たちは一緒にいるわけで、地域の中にいるわけで、ってなったら絶対に耳を傾けないといけないし。よく聞きましたね、「どうですか?」「何か言ってください」って。言ってくればありがたいのと、裏では言ってほしくない。「先生には言ったよ」「そうなん」とか「いらんこと言うなや」とか、それはそれでなんか一体感があって。そういうふうな関係でいたいですね。(F教諭)

初任者に限らず、「報告・連絡・相談」は職務遂行上の基本である。調査対象者の発言からは、新任教員が教育活動を進めるにあたっては先輩教員に相談することが有効であり、その重要性を実感して学んでいる様子が窺える。また、B教諭の発言にもあるように、特別支援学級担任など様々な立場の教職員との連携が重要であることを理解して関係を構築していると思われる。

また、新任教員が地域連携の前面に立つ場面は多くないと思われるが、保護者との連携なしには生徒指導も学級経営も始まらない。調査対象者の発言からもその重要性を実感していることが窺われ、工夫して保護者との信頼関係構築に取り組む姿勢が見て取れる。

4 おわりに

本稿の目的は、新任教員が着任後に直面する困難の実態及び新任教員に求められる資質能力について、新任教員自身を対象としたインタビューを通して検討することである。以下、調査を通じて明らかになった点を整理して本稿の結びとする。

まず、新任教員が直面する困難についてである。本稿では、インタビューを通して、「配慮を要する児童への対応」「学級経営や児童との関係構築」「教科指導」「職務の多忙」の4点に整理した。「配慮を要する児童への対応」「学級経営や児童との関係構築」「教科指導」は、校長インタビューや指導教員インタビューと共通する内容であり、教員としての「実践」に関する課題である。現在の教員養成課程は理論中心の授業科目と体験や実習といった実践的な授業科目で構成されている。近年、ボランティア活動などの学校体験活動が重視されつつあるものの、教職学生が教科指導や生徒指導に関する実践を体系的に学習する場面は、依然として、教育実習を中心としたわずかな機会に限定されている。新任教員が直面する「実践」に関する困難を軽減するには、教員養成課程において理論知と実践知を有機的に結合するような取組を一層推進していく必要がある。

次に、新任教員に求められる資質能力についてである。本調査では、新任教員に対し、自身の経験を通じて、新任時に必要になる資質能力について聞き取りを行った。その結果、「社会人としての素養」「教師としての素養」に関しては、先輩教員に相談したり先輩教員からの助言を謙虚に受け止めたりする姿勢や教育に対する情熱を持つことの重要性を指摘する発言が多く得られた。この点は、校長インタビューにおいて指摘された点と共通する⁵⁾。「子ども理解」「学級経営」「生徒指導」に関しては、児童との信頼関係を構築する力およびその前提として児童を多面的に理解する姿勢の重要性が指摘された。この点は、指導教員インタビューにおいて、初任者研修の拠点校指導教員が強調した点でもある⁶⁾。「教科指導」においては、調査対象者の発言から、教員養成課程において行った指導案作成や模擬授業練習、ICT活用の経験が、実際に教職に就いた後、職務を遂行していく上で非常に有効であることが示唆された。また、調査対象者は、学習内容の系統性の理解や学習評価について、教員養成課程で十分に学修していなかったものの、実際に職務を遂行する上で必要だったと言及している。この点は、指導教員インタビューでも指摘された点でもある⁷⁾。

以上、本研究グループは、本稿で実施した新任教員インタビューおよび校長インタビュー、指導教員インタビューを通して、新任教員が直面する困難および新任教員に求められる資質能力につい

て調査を進めてきた。これらの調査は、実態の一端を描出することはできたものの、調査対象が限定されていることから、新任教員を巡る普遍的な状況を明らかにできたとは言い難い。今後は、これらの調査で得られた知見をもとに、量的調査が必要になろう。これについては、稿を改めて検討したい。

5 註

- 1) 他にも、教員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（1997年）、教員養成審議会審議会第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」（1999年）、中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」（2005年）、中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（2012年）などがあげられる。
- 2) 酒井研作・梶田英之・斉藤正信・丹孝子・山田恵次・道法亜梨沙「新任教員に求められる資質能力に関する研究—校長対象インタビューを通して—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第7巻，2021年，89-98頁。
- 3) 酒井研作・梶田英之・安田仁・丹孝子・山田恵次・道法亜梨沙「新任教員に求められる資質能力に関する研究（Ⅱ）—初任者研修指導教員対象インタビューを通して—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第8巻，2022年，61-70頁。
- 4) 教育公務員特例法第22条の3にもとづき、各任命権者が策定した「教員としての資質に関する指標」を指す。今回の調査では、北海道，秋田県，山形県，福島県，千葉県，長野県，滋賀県，大阪府，岡山県，徳島県，大分県の「教員育成指標」を参考にした。
- 5) 酒井研作他，前掲注2），97頁。
- 6) 酒井研作他，前掲注3），65-67頁。
- 7) 酒井研作他，前掲注3），67-68頁。

6 参考文献

- ① 教員養成審議会『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）』1997年。
- ② 教員養成審議会『養成と採用・研修との連携の円滑化について（第三次答申）』1999年。
- ③ 中央教育審議会『新しい時代の義務教育を創造する（答申）』2005年。
- ④ 別惣淳二・岩田康之・米沢崇・諏訪英彦・梅澤実「小学校教員の資質能力形成に関する調査研究—学部生と新任教員の到達度評価を中心に—」『兵庫教育大学研究紀要』第36巻，2010年，31-38頁。
- ⑤ 中央教育審議会『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）』2012年。
- ⑥ 別惣淳二・渡邊隆信編『教員養成スタンダードに基づく教員の質保証 学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築』ジアース教育新社，2012年。
- ⑦ 名取川知子・渡邊隆信編『教員養成と研修の高度化 教師教育モデルカリキュラムの開発に向けて』ジアース教育新社，2014年。
- ⑧ 高平小百合・太田拓紀・佐久間裕之・若月芳浩・野口穂高「小学校教師にとって何が困難か？—職務上の困難についての新任時と現在の分析—」『論叢：玉川大学教育学部紀要』2014年，103-125頁。
- ⑨ 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め

合う教員養成コミュニティの構築に向けて（答申）』2015年。

- ⑩ 大塚弥生「新任教員が会おう困難と職場適応のプロセス—ナラティブから見るレジリエンス—」『アカデミア（人文・自然）』第10号，2015年，151-168頁。
- ⑪ 山口晴敬「高等学校の新任教員は何に悩んでいるのか—ナラティブに着目し探索する—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第134号，2019年，63-79頁。
- ⑫ 酒井研作・梶田英之・斉藤正信・丹孝子・山田恵次・道法亜梨沙「新任教員に求められる資質能力に関する研究—校長対象インタビューを通して—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第7巻，2021年，89-98頁。
- ⑬ 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協同的な学びの実現～（答申）』2021年。
- ⑭ 酒井研作・梶田英之・安田仁・丹孝子・山田恵次・道法亜梨沙「新任教員に求められる資質能力に関する研究（Ⅱ）—初任者研修指導教員対象インタビューを通して—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第8巻，2022年，61-70頁。
- ⑮ 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』2022年。